



草花は、枇杷と並ぶ南房総市の特産品。道の駅も年間を通して花に囲まれ、訪れる人々の目を楽しませる



初来日し、千葉県内の道の駅を視察するビンアン村の研修員。陳列方法など商品のより良い「見せ方」についても学んだ

そんな加藤さんは、道の駅を「地域を映す鏡」とも表現する。道の駅で人々が生き生きと働いている姿こそ、地域全体が活力に満ちている証しだからだ。地元を誰よりも愛し、道の駅とともに12年間奔走してきた加藤さん。その挑戦は、ベトナムの地でも続けられている。

駅を地域の農産物の集荷・販売・配送の拠点とし、生活が苦しい人々が多いビンアン村とその周辺地域の農家の収入を向上させ、自立を図っていくことが目的だ。「最近、周辺のホテルやスーパーなどから、地元産の野菜を欲しいという声が増えてきました。現在は、農民が自分の畑で収穫した作物を仲買人が買い集め、近郊の市場で販売している状況ですが、将来的には農民自ら品質の標準化などを進めながら、安心野菜としての地域ブランドを確立するお手伝いをしたいと考えています」

地域活性化への貢献で「観光カリスマ百選」に

頭には農産物の輸入自由化やバブル経済の崩壊の影響で、農業や観光業といった基幹産業が衰退する。そうした状況の打開策として期待されたのが「とみうら枇杷倶楽部」。道行く人々の「休憩施設」、歴史や文化、観光情報などを伝える「情報発信基地」としてだけでなく、地元の人々が作る特産品の販売などを通じた「地域振興の拠点」として、地元を挙げて設置に取り組んだ。そして、この千葉県初の試みの指揮を執ったのが、駅長の加藤さんだった。

成功。さらに、観光ポータルサイトを立ち上げて南房総の観光情報を発信するなど、地元の農家や商店、観光関連の事業者などを巻き込んだ地域振興に取り組みできた。そうした地道な努力が実を結び、かつては年間20万人にまで落ち込んだ旧富浦町の訪問者が100万人を超え、「とみうら枇杷倶楽部」の年商も6億円に達するなど、地域全体の活性化に大きく貢献した。04年には、地元を根を張った長年の活動が評価され、国土交通省が認定する「観光カリスマ百選」にも選ばれた。

「大切なのは施設を設けることよりも、地域振興のための機能。そして地域住民が、自分たちの誇りと感じられる場を作り出すこと。『とみうら枇杷倶楽部』で私たちが何より重視してきたその心を持ち続けられれば、きつとうまくいくはずですよ」



ビンアン村近郊の市場で売られる花や野菜。品質保持と食の安全、農民所得の向上のためにも、今後は道の駅を拠点とした販路の拡大が求められる

かとう・ふみお
1950年千葉県生まれ。高校卒業後、安房郡富浦町（現南房総市）役場に就職。91年観光企画課長、92年道の駅「とみうら枇杷倶楽部」駅長、2003年富浦町役場総務課長。道の駅での功績が認められ、04年国土交通省「観光カリスマ百選」に認定。09年4月より現職。2010年10月から、JICA草の根技術協力事業「南房総の『道の駅』の知見を活かした住民参加による地域振興」のプロジェクトリーダーを務める。



2010年1月、「ビンアン道の駅」の落成記念式典に出席し、地元メディアの取材を受ける加藤さん（左）。「地域住民にとっての誇りとなる施設になれる」とエールを送った

ベトナムの国道1号線に「道の駅」がオープン

南北に延びるベトナムの国土を、縦に貫く国道1号線。北部の首都ハノイから、南部の大都市ホーチミンまでバスで約30時間、およそ1800キロの道のりだ。そのほぼ中間にある中部クアンナム省ビンアン村の国道沿いに2010年1月、「ビンアン道の駅」がオープンした。

「今のところは、食堂と休憩施設、ドライバーの仮眠室だけですが、国道1号線は交通量が多く事故が多発しているにもかかわらず、沿線には同様の施設がほとんどないため、集客と交通安全の両面で大きな可能性を秘めています」

そう話すのは、千葉県南房総市の企画部長・加藤文男さん。国道道の駅コンクリール「道の駅グランプリ2000」で同市の道の駅「とみうら枇杷倶楽部」を日本一に導いた、初代駅長だ。

そんな道の駅エキスパートの加藤さんに、ベトナムの「ビンアン道の駅」の開設を支援する日本の団体から、アドバイザーとして白羽の矢が立ったのは07年。現地の人々とともに奮闘を続け、見事、約2年かけてオープンすることができた。その後、この道の駅をさらに活性化すべく、今度は南房総市が地域ぐるみで、JICAの草の根技術協力事業「南房総の『道の駅』の知見を生かした住民参加による地域振興」を開始。加藤さんもプロジェクトリーダーとして定期的に現地を訪れ、アドバイスに当たる。道の

道の駅「とみうら枇杷倶楽部」初代駅長 KATO Fumio

加藤文男さん

「とみうら枇杷倶楽部」の特産品コーナー内で、新発売の枇杷ドーナツの出来確かめる加藤さん。枇杷を使った商品はこの地域の名産として、観光客から幅広い人気を誇る



「地元の誇りを感じられる『道の駅』をつくりたい」

地元の名産などを取りそろえ、訪問客に地域の魅力を伝える「道の駅」。千葉県南房総市の道の駅の初代駅長として、地域活性化を支えてきた加藤文男さんが、現在、ベトナムの農村でその経験を伝えている。

第24回

ゲンバの風

